

昇試随意参考として

『い万^まこむといひしば可^かり尔^にな可^かつ支^きのありあ介^け能^のつ支^きをまちいでつる可^か那^な』

と、特に連綿の呼吸に注意して、半切二行に臨書する。

落款は全体の調和を考えて位置と大きさを決め「○○臨」と入れる。

※随意部参考（半紙・条幅）としてもご活用下さい。抜粋可。

一字書（九月二十二日締切）

課題

織

- (1) 書体自由
- (2) 半紙タテ ※ヨコは中止
- (3) 落款は余白に調和を工夫し書き入れる
- (4) 出品料 四四〇円
- (5) バーコード券貼付 太枠内の臨昇の隣の空欄に
一字と記入 段級は無記入

昇試第一部漢字課題

(九月二十二日締切)

A

鈴木静村先生書

履穿過我柴門客 笠重歸來竹院僧 (曾幾)
履穿^{りつか}って我を過^すぐ柴門^の客、笠重^{かさか}くして帰^{きた}り來^るる竹院の僧。

B

高橋香樹會長書

我・重・竹・僧の二画目は左方から逆入的に入筆し、バネで左下へ弾き返す用筆。この入筆を習熟することにより、用筆の新発見と自信への深めを得られる。過之繞は大きく暢びやか。私の草書体、一画目の入筆強く。柴・頭部の短縦画に変化を。門 墨継ぎ、左右縦画は太細の対応。客 冠大きく字幅。笠 筆調鎮めて、末画はやや離して、軽く抜く。重 一画目前述どおり。末画離して短く。歸 偏の書き方は多い。字典で調べ。來 一画から二画への返し筆、これが大切。竹 墨継ぎ。

行草半々による作だが、一行目に行書多く二行目は草書が多い。見所は、「歸」の終画から「來」の二画目、「竹」の縦画へとの流れ。それに比べて二行目は単体の作で流れには欠けるか。「門」は下すばまりとし、「來」の草書は間違いが多く字なので注意したい。連綿は三ヶ所。墨継ぎ「門」と「來」。

訳：履をはいた人が私の家を訪ね、重い笠をかぶった僧が竹林の中の寺へ帰ってゆく。

予告 (十月二十二日締切)

揚子江頭水拍天

人家種柳住江邊 (馬祖常)

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

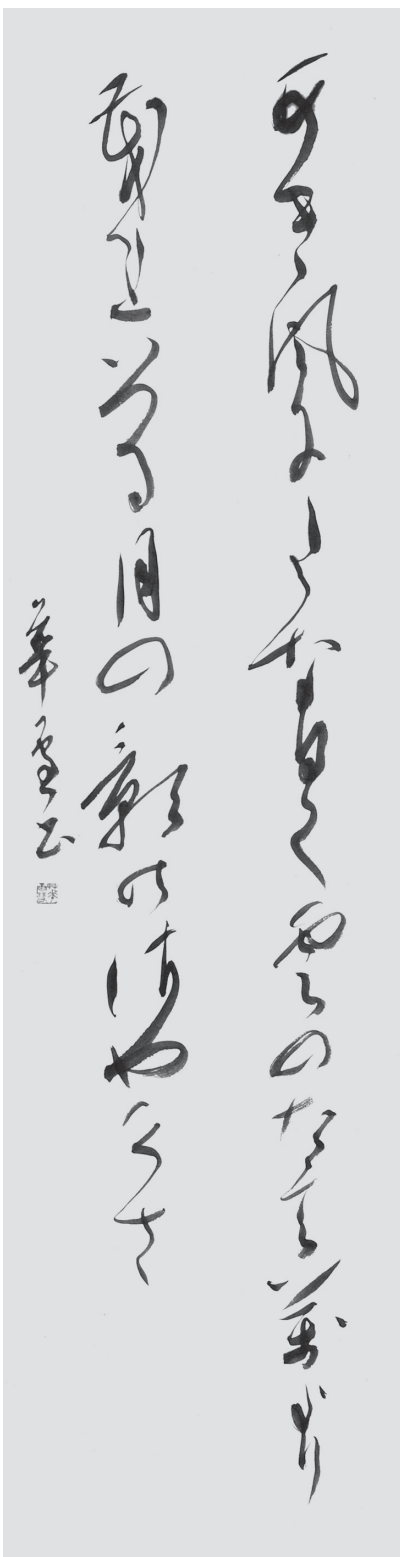
昇試第一部かな課題

(九月二十二日締切)

A

平岡華雪先生書

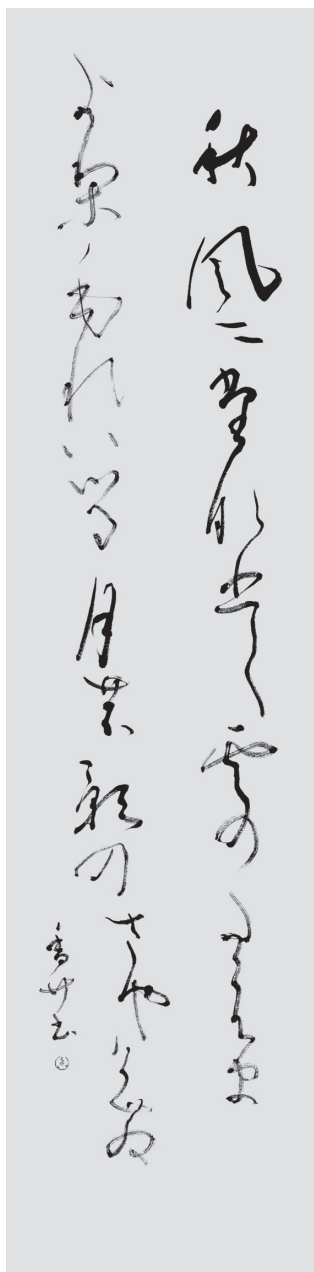
秋風にたなびく雲の絶え間よりもれいづる月のかげのさやけさ (新古今和歌集 左京大夫顕輔)
あき風尔多な日久雲のた衣萬より茂連いつる月の影能佐やけさ



B

青柳香竹先生書

秋風二堂那悲久雲の多え間よ梨毛れい川の月農影のさやけさ



学び方

歌意：秋風が吹く空には白い雲が飛ぶように流れている。白い雲の切れ目に現れた月、その光の何と清らかに、美しく見えることであろう。春の花(さくら)、秋の月、冬の雪、雪月花—はこの世の清く美しいものの代表とされる。墨たっぷり書き始めは、小さく間合いもとりました。二行書きは隣りあう字幅や密度、漢字や変体仮名により行の響き合いに気をつけて書くといいですね。終句は少しの変化を加えました。作品づくりには、名品に会い、深く鑑賞する機会が多くあることが大切です。

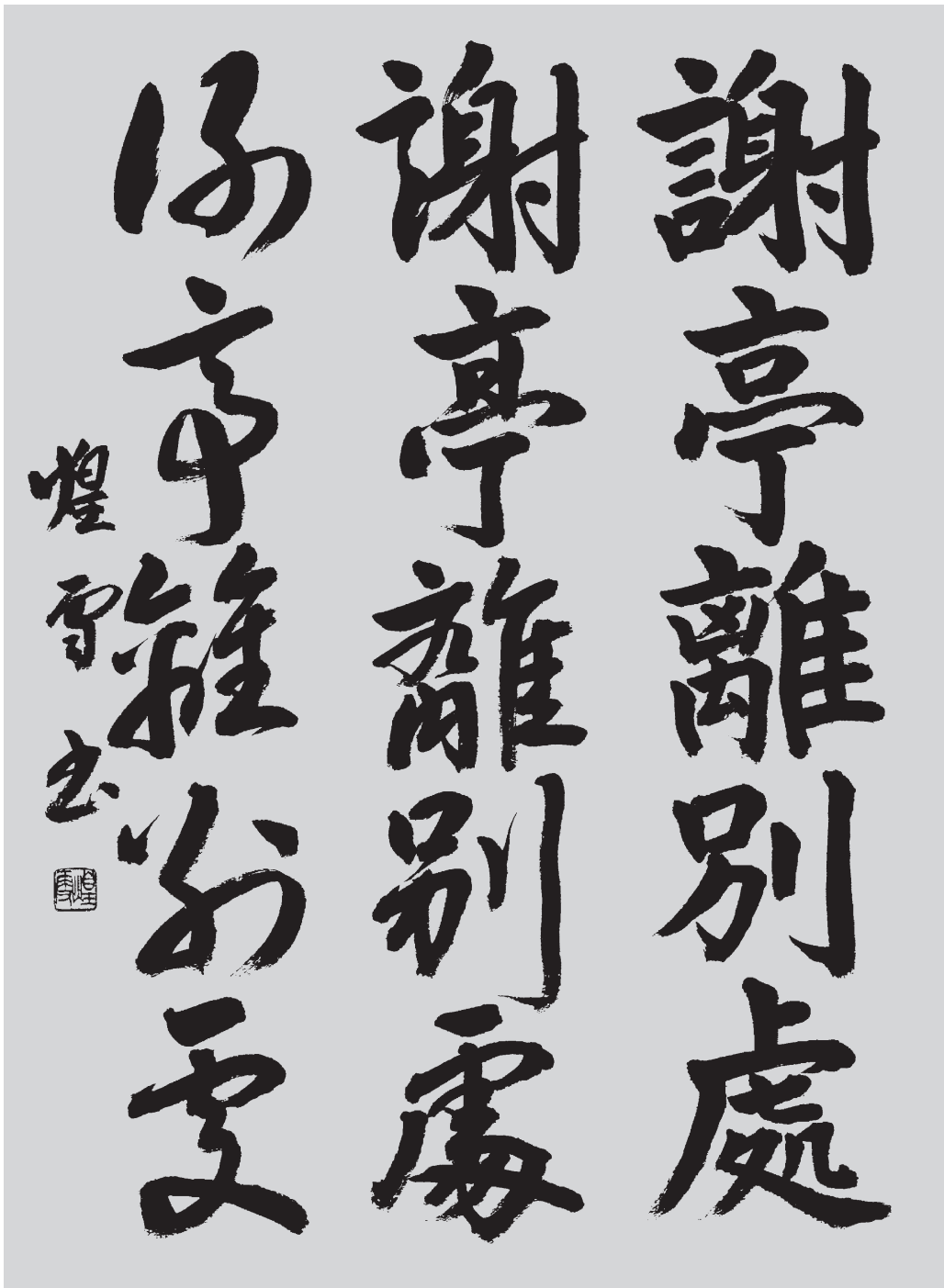
予告 (十月二十二日締切) うづら鳴く真野の入江のはま風に尾花なみよる秋の夕暮 (金葉和歌集 源俊頼)

藤原顕輔(一〇九〇年—
一一五五年)正三位左京大
夫。顕季の子。一門には歌
人・歌学者が多く、「詞花
集」の撰者。歌集「左京大
夫顕輔卿集」がある。
新古今和歌集—総数一九
七九首。第八番目の勅撰和
歌集。一二一六年、家長に
より清書され完成した。西
行九四、慈円九二、良経七
九。新古今歌風、新古今
調といわれるものは、感覚
的な象徴美であるとされる。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

星野 煌雪 先生 書

謝亭離別處(謝公亭)
謝亭、離別の処



訳：ここ謝公亭は、人との別れで知られた場所

お詫びと訂正

七月号十頁の予告は誤りでした。正しくは「謝亭離別處」です。
お詫びして訂正します。

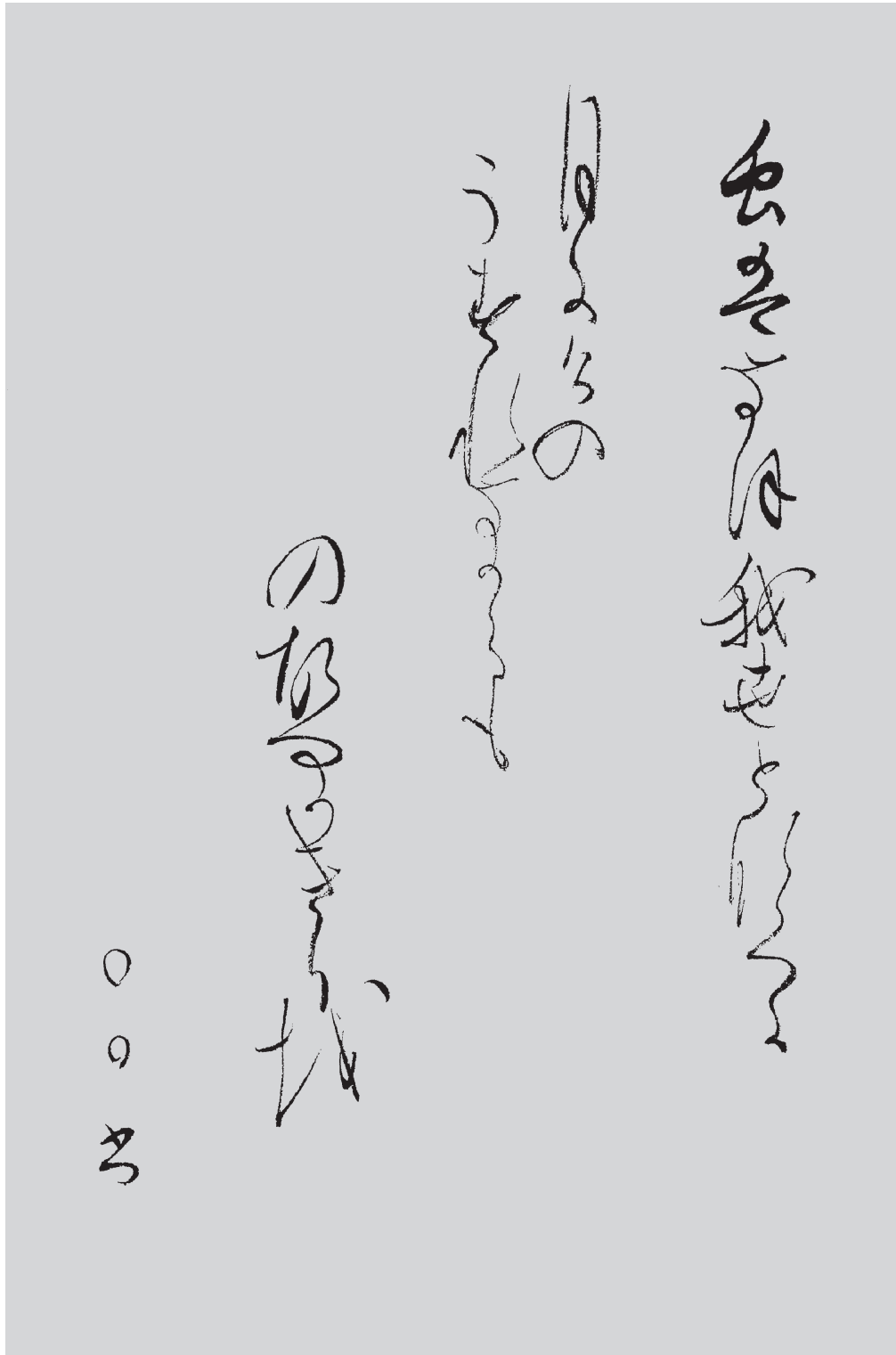
◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第二部かな課題

(九月二十二日締切)

高塚竹堂先生書

虫はなほ我世となくに月かげのうすれながらもこのころかぎりを

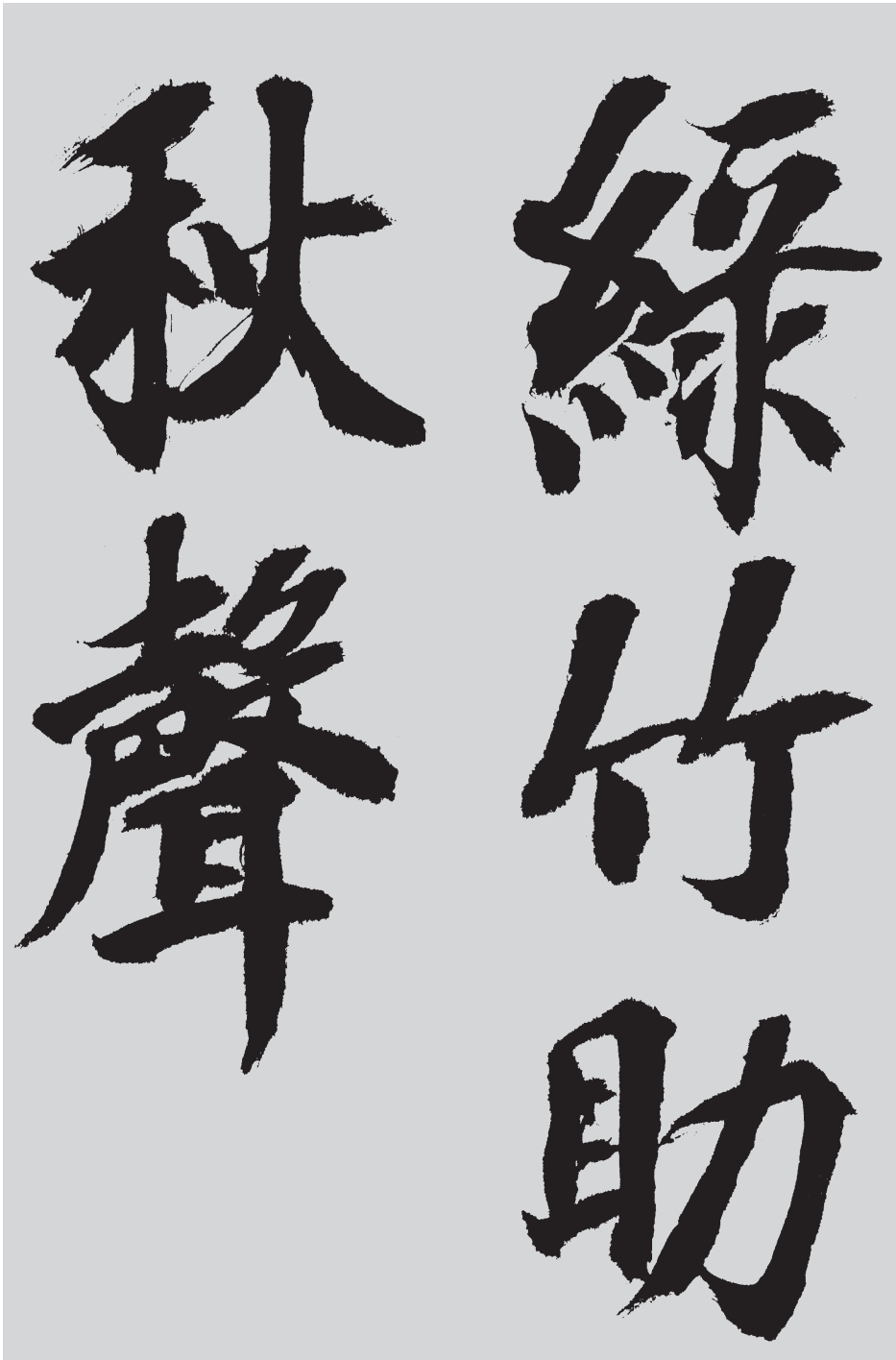


◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

平岡華雪先生書

緑竹秋声を助く(李白)

訳：緑の竹が秋風の音をたすけているようだ。



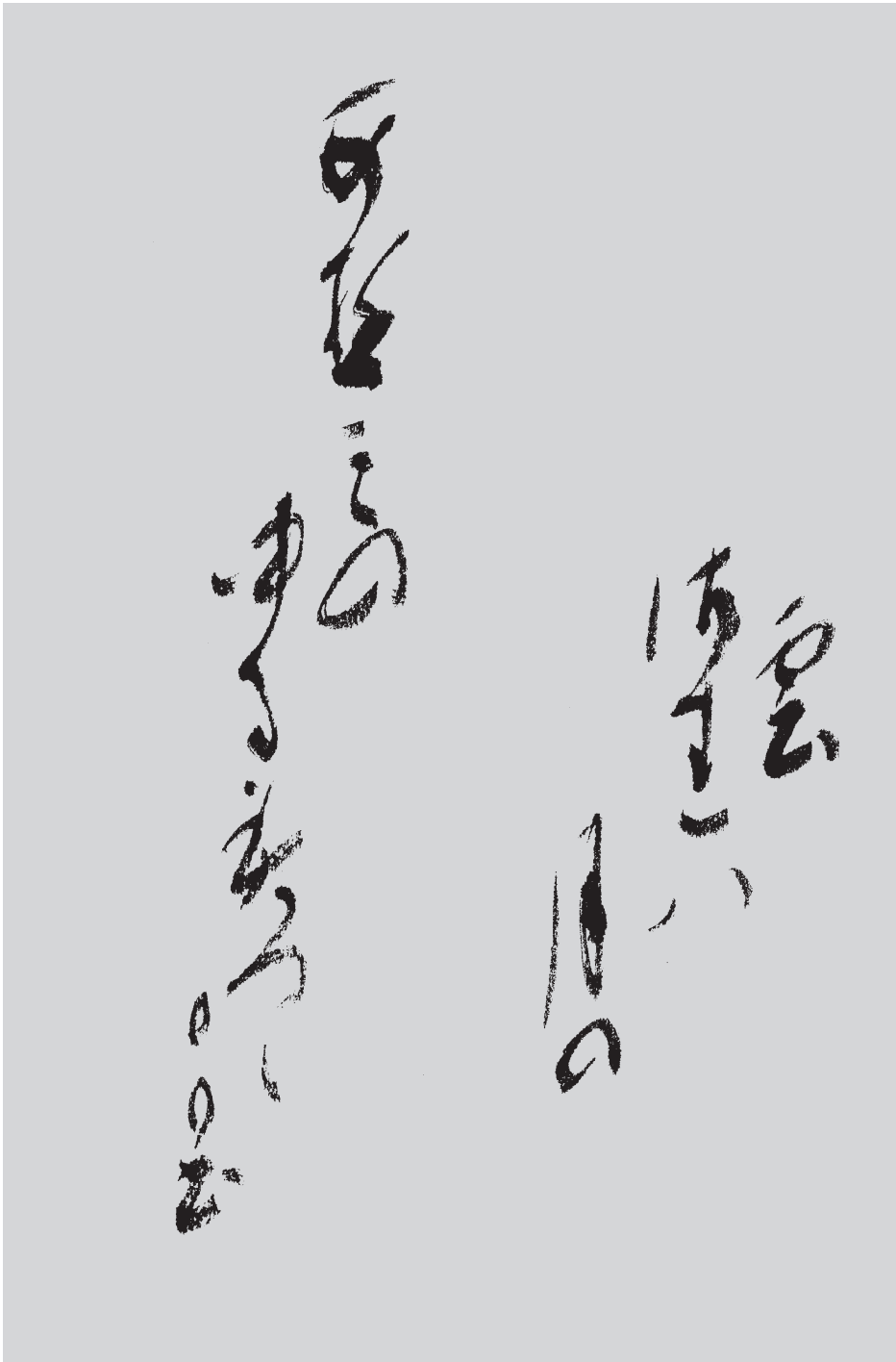
〈基本用筆の一つ〉

「緑・竹・秋」の第一画、頭部の入筆(打ち込み)は逆筆で強く入り、パネを利かせてはね返します。この用筆が決められると画は活きる。「竹」一画目と四画目は上を長く出す。「秋」の「火」の三画目はまっすぐ下へ。「聲」分間の空きに注意。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

平岡華雪先生書

雲去れば月の歩みのゆるみつゝ、(たかし)
雲佐連八月のお遊三のゆる美つゝ、



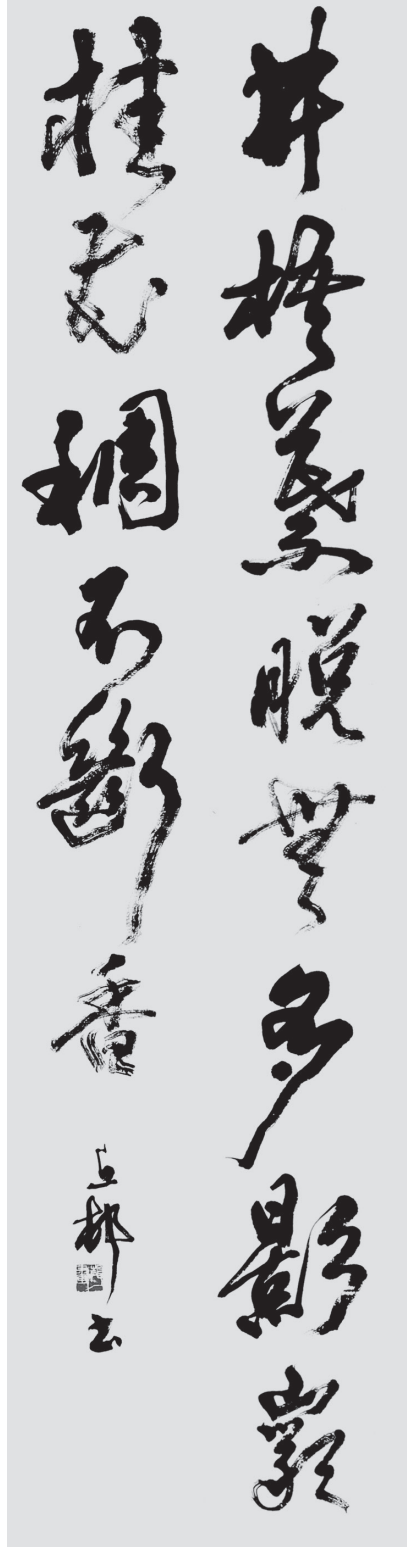
〈書調を感じとること〉
落款まで、ひと筆で書き通しています。書調は素朴で、潤濁がところどころに表出され、自然に変化をみせています。根本は、遅速・抑揚のリズムです。まず書調を自分として感じとり、部分練習を。ここで遅速、抑揚を会得して下さい。この間に、字形、連綿を頭に入れ、漸次思い切って書き通すように。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇 試 随 意 参 考

戸 張 丘 邨 先 生 書

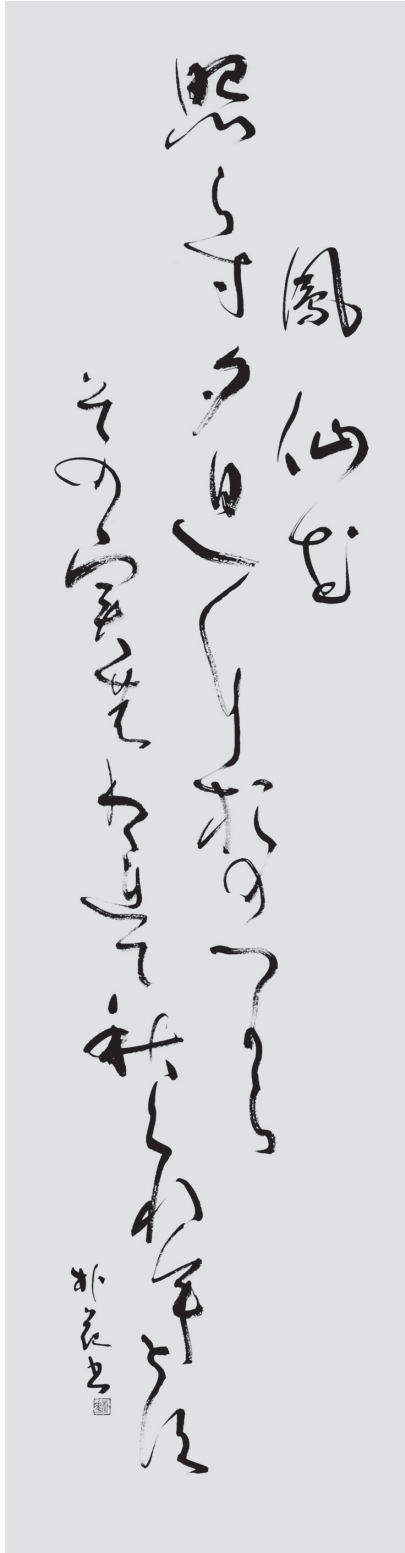
井梧葉脱無多影 巖桂花稠不斷香（戴復古）
井梧葉脱して多影無く巖桂花稠く香を断たず。



訳：井戸への梧桐は葉が落ちて影がまれに、木犀の花は多く咲いて芬々として香りを送るのである。

向 山 朴 花 先 生 書

鳳仙花照らす夕日におのづからその実のわかれて秋くれむとす（金子薫園）
鳳仙花照らす夕日耳於のつ可らその実農わ連て秋久れ牟と須

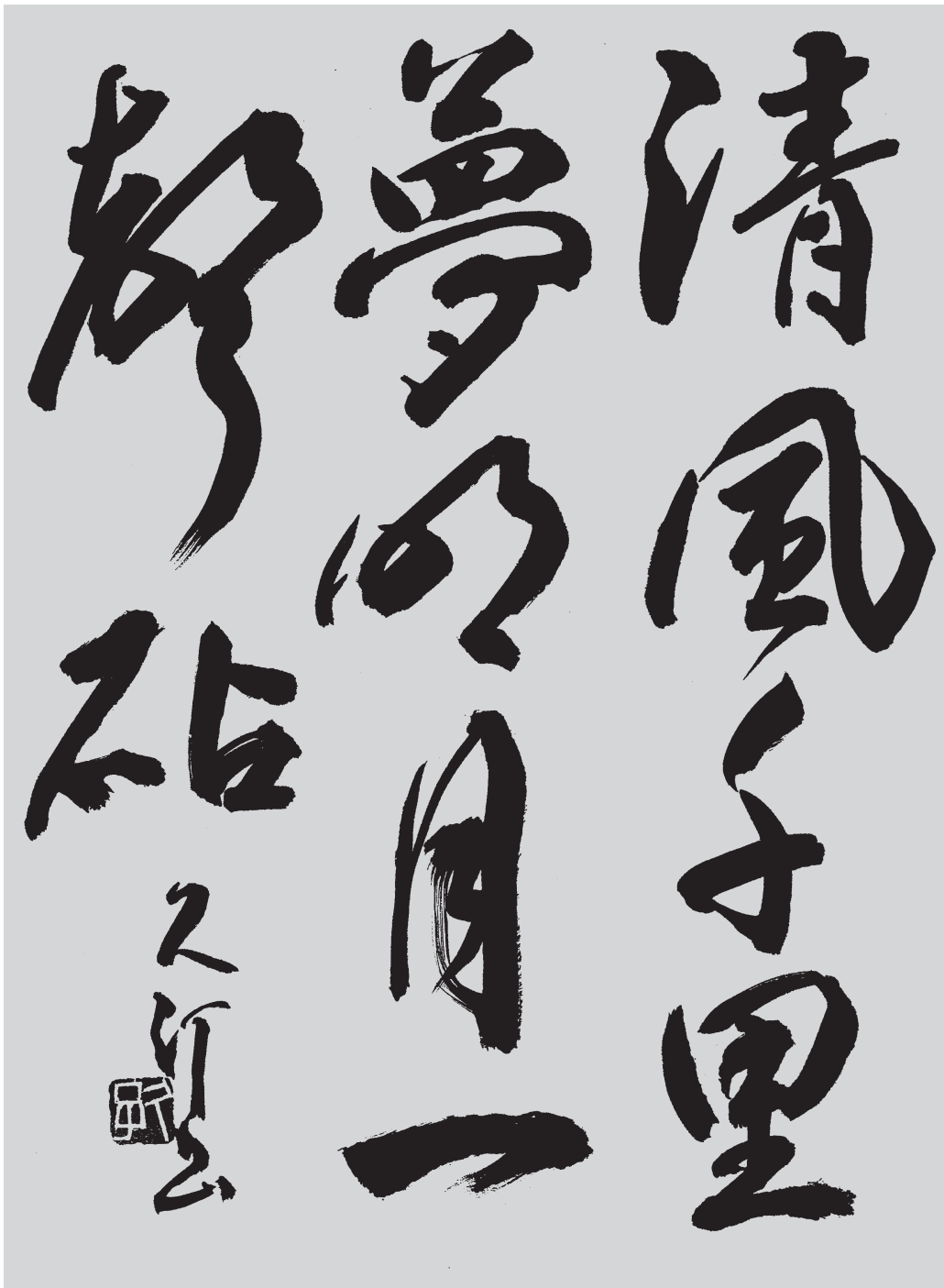


◆注 意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇 試 随 意 参 考

笹崎久汀先生書

清風千里夢 明月一聲砧（葛長庚）
清風千里の夢、明月一声の砧。



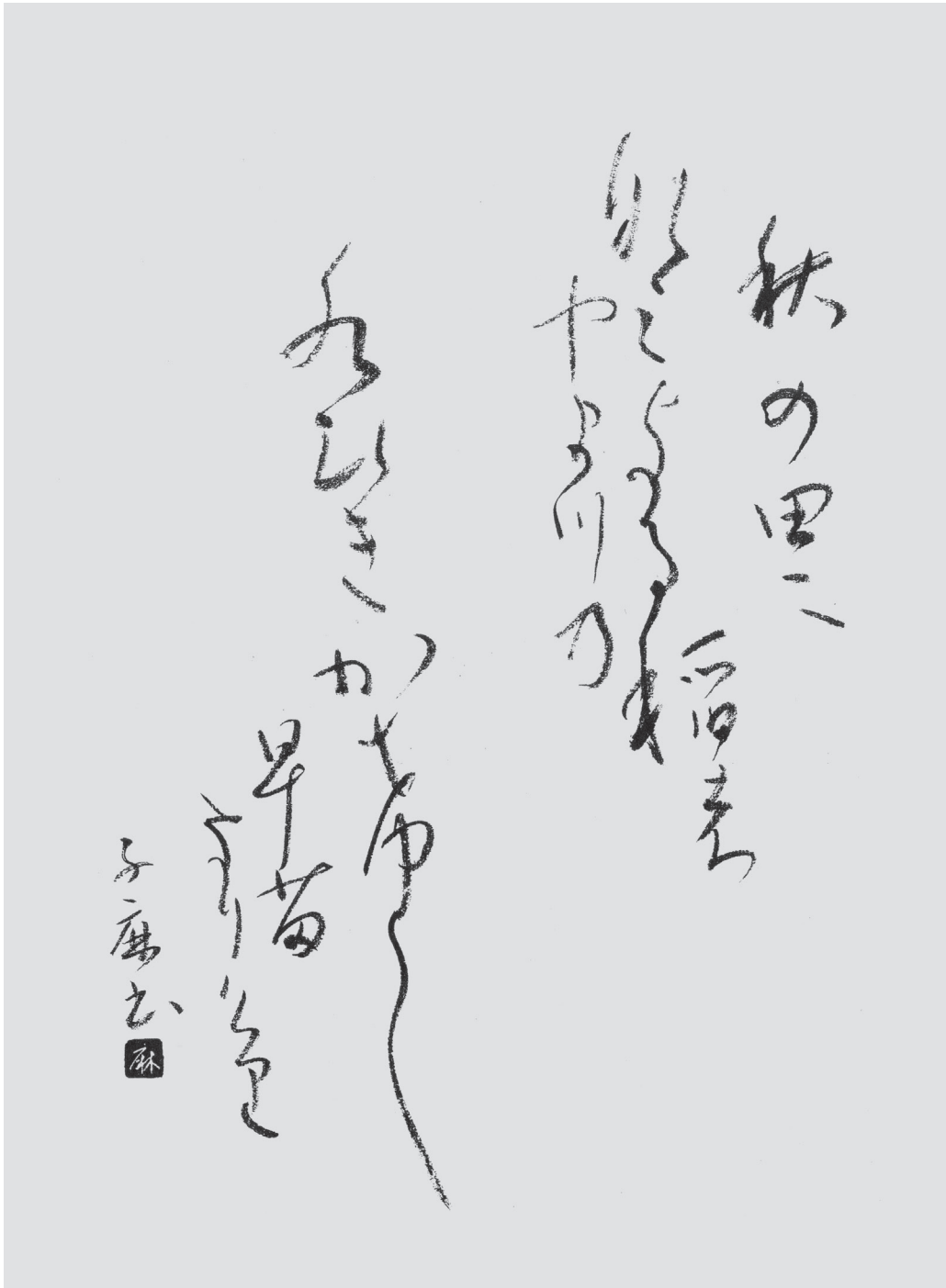
訳…すずしい風は千里遠くの夢までも吹き送り、明るい月には何人が打つか一声の砧（きぬた）が聞える。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇 試 随 意 参 考

林
子
麻
先
生
書

秋の田になみよる稲は山川の水ひきかけし早苗なりけり（相模）
秋の田^{になみよ}る稲^は山川^{の水ひき}かけし早苗^{なりけり}（相模）



◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

硬筆部課題参考

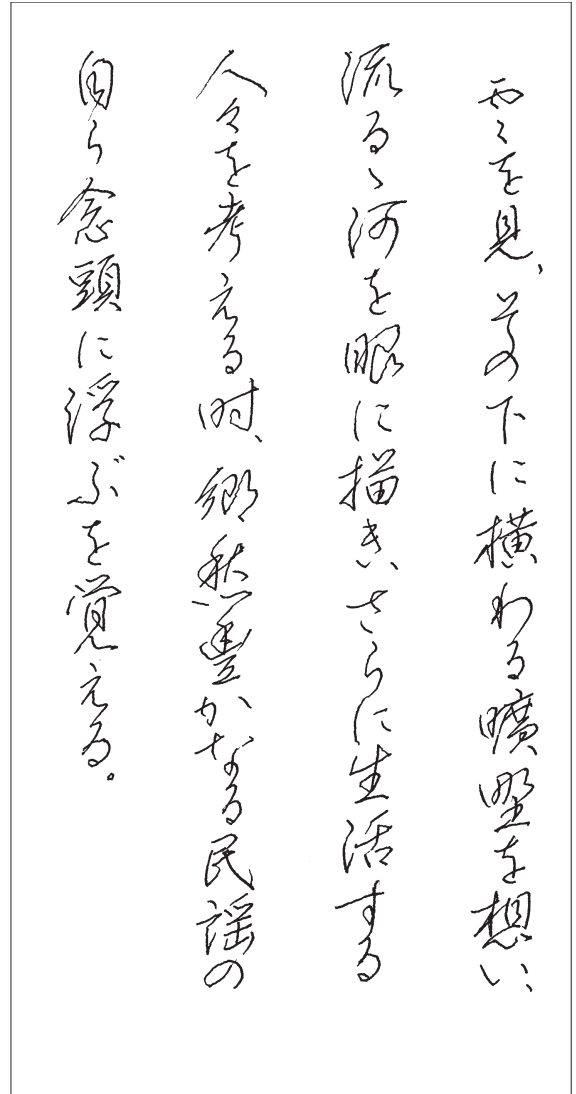
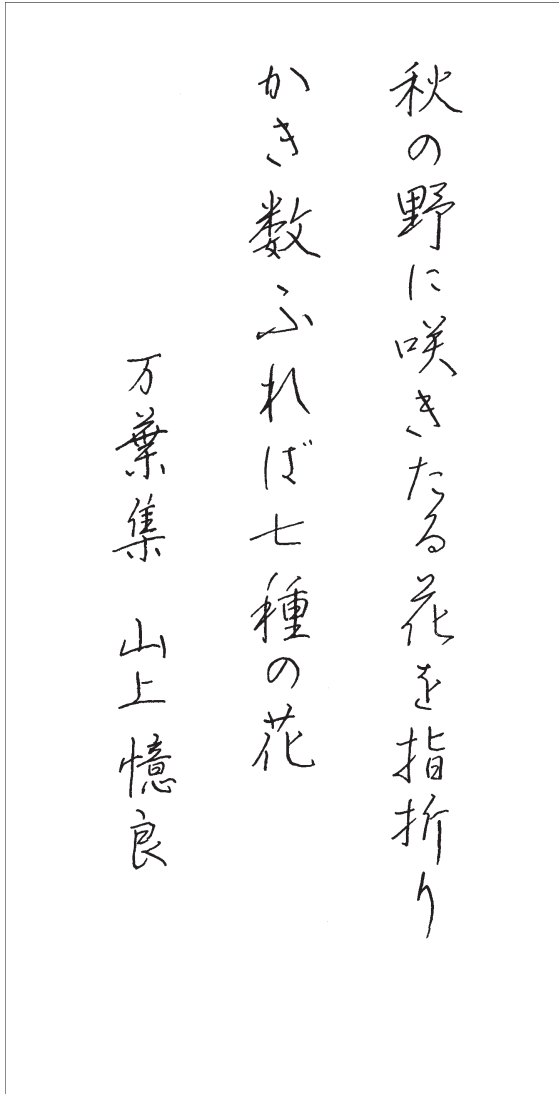
(九月二十二日締切)

湯澤春翠先生書

稲畑曄穂先生書

課題2 (初段階以下)

課題1 (初段階以上)



課題1 (初段階以上)

雲を見、その下に横わる曠野を想い、流るゝ河を眼に描き、さらに生活する人々を考える時、郷愁豊かなる民謡の自ら念頭に浮ぶを覚える。
〔常に自然は語る〕 小川未明

◆注意

- (1) 自分の段階に合った課題を選択。
- (2) ペンまたはボールペン(黒色)を使用のこと。青インクは不可。
- (3) 段級欄は本人が記入(色は黒)はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位) 次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新
- (5) 会員は無料・会員外は四六〇円

課題2 (初段階以下)

秋の野に咲きたる花を指折りかき数ふれば七種の花

〔万葉集〕 山上憶良